

41

日語文學叢刊之一

兩條血痕

上海開華書局版

上海图书馆藏书



A541 212 0006 86288

日語文學叢刊之一

漢文
譯註

兩條血痕

兩筋の血



夢の様な幼少の時の追憶、喜びも悲みも罪のない事許り、それからそれと朧氣に續いて、今になつては、皆、仄かな哀感の霞を隔てゝ麗かな子供芝居でも見る様に懐かしいのであるが、其中で、十五六年後の今日でも猶、鮮やかに私の目に残つてゐる事が二つある。

何方が先で、何方が後だつたのか、明瞭とは思出し難い。

註 (1) 仄かな—徹徹的；暗黙的。(2) 芝居—演劇。(3) 目に残つて—留

在眼前。(4) 思出し—回想起。

(1)

098596

が私は六歳で村の小學校に上つて、二年生から三年生に進む大試験に、私の半生に唯一度の落第をした。其落第の時に藤野さんがゐたのだから、一つは慥か二度目の二年生の八歳の年、夏休み中の出來事と憶えてゐる。も一つも、暑い盛りの事であつたから、矢張其頃の事であつたらう。

今では文部省令が厳しくて、學齡前の子供を入學させる様な事は全く無いのであるが、私の幼かつた頃は、片田舎の事でもあり、左程面倒な手續も要らなかつた様である。でも數へ年で僅か六歳の、然も私の様に羸弱者の入學するのは、餘り例のない事であつた。それは詰り、平生私の遊び仲間であつた一歳二歳年長の子供等が、五人も七人も一度に學校に上

つて了つて、淋しくて、耐らぬ所から、毎日の様に好人物の父に強請^三つた爲なので、初めの間こそお前はまだ餘り小いからと禁めてゐたが、根^四が悪い事ぢや無し、父も内心には喜んだと見えて、到頭或日學校の高島先生に願つて呉れて、翌日からは私も、二枚折^五の紙石盤やら硯やら石筆やらを買つて貰つて、諸友と一緒に學校に行く事になつた。されば私の入學は、同じ級の者より一ヶ月も後の事であつた。父は珍らしい學問好で、用^六のない冬の晩などは、字が見えぬ程煤びきつ

註 (1) 暑い盛り—酷暑；毒熱天。(2) 面倒な—麻煩的；累贅的。(3) 強

請つた—逼迫，強要。(4) 根が悪い—根本不好；原來壞的。(5) 二枚折

の紙石盤—對摺的紙石板。(6) 用のない—沒事；閒着。

て、表紙の襪褌になつた孝經やら十八史略の端本やらを持つて、茶話ながらに高島先生に教はりに行く事などもあつたものだ。

其頃父は三十五六、田舎には稀な程晩婚であつた所爲でもあらうか、私には兄も姉も、妹もなく唯一粒種、剛い言葉一つ懸けられずに育つた爲めか背丈だけは普通であつたけれども、ひよろ／＼と痩せ細つてゐて、随分近所の子供等と一緒に、裸足で戸外の遊戯もやるにかゝはらず、怎したものの顔が蒼白く、駢競でも相撲でも私に敗ける者は一人も無かつた。随つて、さうして遊んでゐながらも、時として密り一人で家に歸る事もあつたが、學校に上つてからも其性癖が變ら

ず、樂書五をしたり、木柵を潜り抜けたりして先生に叱られる事は人並であつたけれど、兎角卑屈で、寡言で、黑板に書いた字を讀めなどと言はれると、直ぐ赤くなつて、俯いて、返事もせず石の如く堅くなつたものだ。自分から進んで學校に入れて貰つたに拘はらず、私は遂學科に興味を有てなかつた。加之時には晝休に家へ歸つた儘、人知れず裏の物置六に隠れてゐて、午後の課業を休む事さへあつた。病身の母は、何日か私の頭を撫でながら、此兒も少し他の子供等七と喧嘩でもして呉れる様になれや可いと言つた事がある。私は何とも言は

註 (1) 端本—殘本。(2) 背丈—身高。(3) 駢競—競走。(4) 相撲—角力

。(5) 樂書—牆上亂塗字。(6) 物置—雜物間。(7) 喧嘩—打架。

なかつたが、腹の中では、喧嘩すれ、俺が敗けるもの、と考へてゐた。

私の家といふのは、村に唯一軒の桶屋であつたが、桶屋だけでは生計が立たぬので、近江屋といふ近郷一の大地主から、少し許り田を借りて小作をしてゐた。随つて、年中變らぬ稗^三勝の飯に粘氣がなく、時偶夜話に来る人でもあれ、母が取^四あへず米を一摺み程^五十能で焦つて、茶代りに出すといふ有様であつたから、私なども、年中つきだらけな布の股引^六を穿いて、腰までしかない洗晒しの筒袖^七、同じ服裝の子供等と共に裸足で歩く事は慣れたもので、頭髮の延びた時は父が手づから剃つて呉れるのであつた。名は檜澤新太郎といふのだが

、村の人は誰でも「桶屋の新太」と呼んだ。

學校では、前にも言つた如く、些とも學科に身を入れなかつたから、一年から二年に昇る時は、三十人許りの級のうち尻尻から二番で漸と及第した。悪い事には、私の家の兩隣の子供、一人は一級上の男で、一人は同じ級の女の子であつたが、何方も其時九半紙何帖かを水引十で結んだ御褒賞を貰つたので

(7)

註 (1) 桶屋—箍桶館。(2) 小作—租田來種。(3) 稗勝—稗子多；滿是稗

子。(4) 取あへず—趕快，馬上。(5) 十能—火鏟；火鍬。(6) 股引—緊

褲。(7) 筒袖—小袖。(8) 尻から二番—倒數第二。(9) 半紙何帖—半紙

爲一種平常寫字用紙。何帖，幾刀或幾疊也。(10) 水引—半紅半白的紙捻

，多縛在贈物上作一種飾品。

、私は流石に、子供心にも情ない様な氣がして、其授與式の日は、學校から歸ると、例の様に戸外にも出もせず、日が暮れるまで大きい圍爐裏の隅に蹲つて、浮かぬ顔をして火箸許り弄つてゐたので、父は夕飯が濟んでから、黒い羊羹を二本買つて來て呉れて、お前は一番稚いのだからと言つて慰めて呉れた。

それも翌日になれば、もう忘れて了つて、私は相變らず時々午後の課業を休み／＼してゐたが、七歳の年が暮れての正月、第三學期の初めになつて、學校には少し珍らしい事が起つた。それは、竹藤藤野といふ、村では儔べる者の無い程美しい女の兒が、突然一年生に入つて來た事なので。

百何人の生徒は皆目を聳てた。實際藤野さんは、今想うても餘り類のない程美しい兒だつたので、前髪を眉の邊まで下げた顔が圓く、黒味勝の眼がハツチリと明るくて、色は飽迄白く、笑ふ毎に笑窪^ニが出来た。男生徒は言はずもの事、女生徒といつても、赤い布片か何かで無雜作^ロに髪を束ねた頭を、垢染みた淺黄の手拭^ヒに包んで、雪でも降る日には、不格好^ホな雪沓^セを穿いて、半分に截つた赤毛布を頭からスツポリ被つて來る者の多い中に、大きく菊の花を染めた、派手^ハな唐縮緬^カの

註 (1)羊羹—點心名。(2)ハツチリと—眼睜睜。(3)笑窪—笑窩；笑靨

。(4)無雜作—隨便；不拘禮節。(5)手拭—手巾。(6)不格好—不適合；形式不好。(7)雪沓—雪履。(8)派手—華麗的。(9)唐縮緬—縞綢。

衣服を着た藤野さんの姿の交つたのは、村端の泥田に蓮華の花の咲いたよりも猶鮮やかに、私共の眼に映つたのであつた。

藤野さんは、其以前、村から十里とも隔たらぬ盛岡の市の學校にゐたといふ事で、近江屋の分家の、呉服屋をつてゐる新家といふ家に、阿母さんといふ人と二人で來てゐた。

私共の耳にまで入つた村の噂では、藤野さんの阿母さんといふ人は、二三年も前から眼病を患つてゐた新家の御新造の妹なさうで、盛岡でも可也な金物屋だつたのが、怎した破目かで破産して、夫といふ人が首を縊つて死んで了つた爲め、新家の家の家政を手傳ひ旁々、亡夫の忘れ形見の藤野さんを

件れて、世話になりに来たのだといふ事であつた。其阿母さんも亦、小柄な、色の白く美しい、姉なる新家の御新造にも似ず、いたつて快活な愛相の好い人であつた。

村の學校は、其頃まだ見窄らしい尋常科の單級で、外に補習科の生徒が六七人、先生も高島先生一人限りだつたので、教場も唯一つ。級は違つてゐても、鈴の様な好い聲で藤野さんが讀本を讀む時は、百何人が皆石筆や筆を休ませて、其方許り見たものだ。殊に私は、習字と算術の時間が厭で／＼耐

註 (1) 村端―村外。(2) 御新造―主婦；太太。(3) 可也な―着實可觀。

(4) 破目―裂痕；艱苦失望的狀勢。(5) 手傳ひ―助理。(6) 形見―遺愛

。(7) 小柄―小型；身材短小。(8) 愛相の好い―善交際；和藹可親。

らぬ所から、よく呆然して藤野さんの方を見てゐたもので、其度先生は竹の鞭で私の頭を軽く叩いたものである。

藤野さんは、何學科でも成績が可かつた。何日であつたか、二年生の女生徒共が、何か授業中に悪戯をしたといつて、先生は藤野さんを例に引いて誠められた事もあつた様だ。上級の生徒は、少しそれに不服であつた。然し私は何も怪まなかつた。何故なれば、藤野さんは其頃、學校中で、村中で、否、當時の私にとつての全世界で、一番美しい、善い人であつたのだから。

其年の三月三十日は、例年の如く證書授與式、近江屋の且那樣を初め、村長様もお醫者様も、其他村の人達が五六人學

校に來られた。私も、祕藏の袖の長い衣服を着せられ、半幅の白木綿を兵子帶二にして、皆と一緒に二行つたが、黒い洋服を着た高島先生は、常よりも一層立派に見えた。教場も立派に飾られてゐて、正面には日の丸の旗が交叉してあつた。其前の、白い覆布をかけた卓には、松の枝と竹を立てた、大きい花瓶が載せてあつた様に憶えてゐる。勅語三の捧讀やら「君四が代」の合唱やらが濟んで、十何人かの卒業生が、交る交る呼出されて、皆嬉し相にして卒業證書を貰つて來る。其中の優等生は又、村長様の前に呼レれて御褒賞を貰つた。聽て、三

註 (1) 旦那様—主人。(2) 兵子帶—腰帶。(3) 勅語—此指明治天皇所定

之「教育勅語」、各學校舉行儀式時例須朗誦。(4) 君が代—日本國歌名。

年二年一年といふ順で、新たに進級した者の名が讀上げられたが、怎したものが私の名は其中に無かつた。「新太ア落第だ、落第だ。」と言つて周圍の子供等は皆私の顔を見た。私は其時甚麼氣持がしたつたか、今になつては思出せない。

式が濟んでから、近江屋様から下さるといふ紅白の餅だけは私も貰つた。皆は打件れて勇まし相に家に歸つて行つたが、私共落第した者六七人だけは、用があるからと言つて先生に残された。其中には村端の掘立小屋の娘もあつて、潜々泣いてゐたが、私は、若しや先生は私にだけ證書を後で呉れるのではないかといふ様な、理由もない事を心待ちに待つてゐた様であつた。

躡て一人々々教員室に呼ばれて、それ／＼に誠められたり
勵まされたりしたが、私は一番後廻しになつた。そして、「
お前はまた年もいかないし、體も弱いから、も一年二年生で
勉強して見ろ。」と言はれて、私は聞えぬ位に「ハイ」と答
へて叩頭をすると、先生は私の頭を撫でて、「お前は餘り穩
し過ぎる。」と言つた。そして卓子の上のお盆から、麥煎餅
を三枚取つて下すつたが、私は其時程先生のお慈悲を有難い
と思つた事はなかつた。其室には、村長様を初め二三人の老
人達がまだ残つてゐた。

私は紙に包んだ紅白の餅と麥煎餅を、兩手で胸に抱いて、

註 (1) 打伴れて―作伴；相偕。(2) 煎餅―點心名。

悄悄と其處を出て來たが、昇降口まで來ると、唯もう無暗に悲しくなつて、泣きたくなつて了つた。喉まで出懸けた聲は辛うじて嚙殺したが、先生の有難さ、友達に冷笑れる羞かしさ、家へ歸つて何と言つたものだらうといふ様な事を、子供心に考へると、小さい胸は一圖に迫つて、涙が留度もなく溢れる。すると、怎して残つてゐたものが、二三人の女生徒が小使室の方から出て來た様子がしたので、私は何とも言へぬ羞かしさに急に動悸がして來て、びたりと柱に凭懸つた儘、顔を見せまいと俯いた。

すた／＼と軽い草履の音が後ろに近づいたと思ふと、『何したの、新太郎さん?』と言つた聲は、藤野さんであつた。

それまで一度も言葉を交した事のない人から、恁う言はれたので、私は思はず顔を上げると、藤野さんは、晴乎とした眼に柔かな光を湛へて、凝と私を覗めてゐた。私は直ぐ又俯いて、下唇を嚙締めたが、それでも歔歔が洩れる。

藤野さんは暫く黙つてゐたが、『泣かないんだ、新太郎さん。私だつて今度は、一番下で漸と及第したもの。』と、弟にでも言ふ様に言つて、『明日好い物持つてつて上げるから、泣かないんだ。皆が笑ふから。』と、私の顔を覗き込む様

註 (1)無暗に―無端。(2)辛ラヒて―好容易纔……。(3)一圖―完全。

(4)留度もなく―無盡的。(5)ぴたりと―緊緊地。(6)すたノ、―輕輕
拖曳着的履聲。(7)一番下―最後一名。

にしたが、私は片頬を柱に擦りつけて、覗かれまいとしたので、又すたく／＼と行つて了つた。藤野さんは何學科も成績が可かつたのだけれど、三學期になつてから入つたので、一番尻で二年生に進級したのであつた。

其日の夕暮、父は店先でトン／＼と桶の箍を箆れてゐたし、母は水汲^三に出て行つた後で私は悄然と圍爐裏の隅に蹲つて、もう人顔も見えぬ程薄暗くなつた中に、焚火の中へ竹屑を投げ入れては、チロ／＼と舌を出す様に燃えて了ふのを餘念^四もなく眺めてゐたが、裏口^五から細い聲で、『新太郎さん、新太郎さん。』と呼ぶ人がある。私はハツと思ふと、突然土間へ飛び下りて、草履も穿かずに裏口へ駈けて行つた。

藤野さんは唯一人、戸の蔭に身を擦り寄せて立つてゐたが、私を見ると莞爾笑つて、『まあ、裸足で。』と、心持眉を擧めた。そして急がしく袂の中から、何か紙に包んだ物を出して私の手に渡した。

『これ上げるから、一生懸命勉強するツこ。私もするから。』と言ふなり、私は一言も言はずに茫然立つてゐたので、すた／＼と夕暗六の中を走つて行つたが、五六間行くと後ろを振り返つて、手を顔の前で左右に動かした。誰にも言ふなといふ事だと氣が附いたので、私は頷いて見せると、其儘またす

註 (1) 一番尻―同一番下。(2) 店先―店門口。(3) 水汲―汲水；打水。

(4) 餘念もなく―一心一意。(5) 裏口―後門口。(6) 夕暗―黄昏。

た／＼と梨の樹の下を。

紙包の中には、洋紙の帳面が一冊に半分程になつた古鉛筆、淡紅色メリンスの布片に捲いたのは、鉛で拵へた玩具の懐中時計であつた。

其夜私は、薄暗い手ランプの影で、鉛筆の心を舐めながら、贈物の帳面に、讀本を第一課から四五枚許り、丁寧に謄寫した。私が初めて文字を學ぶ喜びを知つたのは、實に其時であつた。

人の心といふものは奇妙なものである。二度目の二年生の授業が始まると、私は何といふ事もなく學校に行くのが愉く

なつて、今迄は飽きて／＼仕方のなかつた五十分宛の授業が、他愛もなく過ぎて了ふ様になつた。竹の鞭で頭を叩かれる事もなくなつた。

廣い教場の、南と北の壁に黒板が二枚宛、高島先生は急がしさうに其四枚の黒板を廻つて歩いて教へるのであつたが、二年生は、北の壁の西寄りの黒板に向つて、粗末な机と腰掛五を二列に並べてゐた。前の方の机に一團になつてゐる女生徒には、無論藤野さんがゐた。

新學年が始まつて三日目かに、私は初めて先生に賞められ

註 (1)帳面―摘記簿。(2)メリンソー羽紗。(3)飽きて―厭倦。(4)西

寄り―靠西首。(5)腰掛―椅子。

た。黙つて聞いてさへ居れば、先生の教へる事は屹度解る。記憶力の強い子供の頭は、一度理解したことは仲々忘れるものでない。知つた者は手を舉げろと言はれて、私の手を舉げぬ事は殆んど無かつた。

何の學科として嫌ひなものはなかつたが、殊に私は習字の時間が好であつた。先生は大抵私に水注一の役を吩咐けられる。私は、葉鐵で搯二へた水差三を持つて、机から机と廻つて歩く。机の兩端には一つ／＼硯が出てゐるのであつたが、大抵は虎斑か黒の石なのに、藤野さんだけは、何石なのか紫色であつた。そして、私が水を注いでやつた時、些と叩頭をするのは藤野さん一人であつた。

氣キの揉めるのは算術の時間であつた。私も藤野さんも其年八歳であつたのに、豊吉といふ兒が同じ級にあつて、それが私等よりも二歳か年長であつた。體も大きく、頭腦も發達してゐて、私が知つてゐる事は大抵藤野さんも知つてゐたが、又、二人が手を舉げる時は大抵豊吉も手を舉げた。何しろ子供の時の二歳違ひは、頭腦の活動の精不精チに大した懸隔があるもので、その最も顯著に現はれるのは算術である、豊吉は算術が得意であつた。

問題を出して置いて、先生は別の黑板の方へ廻つて行かれ

註 (1) 水注の役―淫水的事。(2) 水差―水壺。(3) 氣の揉める―担心。

(4) 精不精―優劣。

る。そして又歸つて来て、『出來た人は手を舉げて。』と、竹の鞭を高く舉げられる。それが、少し難かしい問題である。と、藤野さんは手を舉げながら、若くは手を舉げずに、屹度後ろを向いて私の方を見る。私は、其眼に満干する微かな波をも見遁す事はなかつた。二人共手を舉げた時、殊にも豊吉の出來なかつた時は、藤野さんの眼は喜びに輝いた。豊吉も藤野さんも出來なくて、私だけ手を舉げた時は、邪氣ない羨望の波が寄つた。若しかして、豊吉も藤野さんも玉を舉げて、私だけ出來ない事があると、氣の毒相な眼眸をする。そして、二人共出來ずに、豊吉だけ誇りに手を舉げた時は、美しい藤野さんの顔が瞬く間暗い翳に掩はれるのであつた。

藤野さんの本を讀む聲は、隣席の人にすら聞えぬ程に讀む他の女生徒と違つて、凜として爽やかであつた。そして其讀方には、村の兒等にはない、一種の抑揚があつた。私は、一月二月と經つうちに何日ともなく、自分でも心附かずに其抑揚を眞似る様になつた。友達はそれと氣が附いて笑つた。笑はれて、私は改めようとするけれども、いざとなつて聲立てゝ讀む時は、屹度其抑揚が出る。或時、小使室の前の井戸側で、六七人も集つて色色な事を言ひ合つてゐた時に、豊吉は不圖其事を言ひ出して、散々に笑つた末、『新太と藤野さん

註 (1) 満干ある—漲落。(2) 暗い翳—暗影。(3) 眞似る—模仿。(4) い

ざとなつて—臨時。

と夫婦になつたら可がんべえな。』と言つた。

藤野さんは五六歩離れた所に立つてゐたつたが、此時、『成るとも。成るとも。』と言つて皆を驚かした。私は顔を眞赤にして矢庭に駈出して了つた。

いくら子供でも、男と女は矢張男と女、學校で一緒に遊ぶ事などは殆んど無かつたが、夕方になると、家々の軒や破風に夕餉の煙の鬨く街道に出て、よく私共は寶奪ひや鬼ごつこをやつた。時とすると、それが男組と女組と一緒になる事があつて、其際は誰しも周圍が暗くなつて了ふまで無中になつて遊ぶのであるが、藤野さんが鬼になると、屹度私を目懸けて追つて来る。私はそれが嬉しかつた。奈何に羸弱い體質

でも、私は流石に男の兒、藤野さんはキツと口を結んで敏く追つて來るけれど、容易に捉らない。終ひには息を切らして喘々するのであるが、私は態と捉まつてやつて可いのであるけれど、其處は子供心で、飽迄も／＼身を翻して意地悪く遁げ廻る。それなのに、藤野さんは鬼ごツこの度、矢張私許り目懸けるのであつた。

新家の家には、藤野さんと従兄弟同志の男の兒が三人あつた。上の二人は四年と三年、末兒はまだ學校に上らなかつたが、何れも餘り成績が可くなく、同年輩の近江屋の兒等と極

註 (1) 矢庭に―立卽。(2) 破風―屋棟之兩端爲山容者。(3) 寶奪ひ―奪寶

。(4) 鬼ごつて―捉迷藏。(5) 口を結んで―緊閉着嘴。(6) 態と―故意。

く仲が悪かつたが、私の臆氣に憶えてゐる所では、藤野さんもよく二人の上の兒に苛責られてゐた様であつた。何日か何處かで叩かれてゐるのを見た事もある様だが、それは明瞭しない。唯一度私が小さい桶を擔いで、新家の裏の井戸に水汲に行くのと、恰度其處の裏門の柱に藤野さんが倚懸つてゐて、一人潛々泣いてゐた。怎したのだと私は言葉をかけたが、返事はしないで長い袂の端を前齒で嚙んでゐた。さうなると、私は性質としてもう何も言へなくなるので、自分まで妙に涙ぐまれる様な氣がして來て、黙つて大柄杓で水を汲んだが、桶を擔いで歩き出すと、『新太郎さん。』と呼止められた。

『何す？』

『好い物見せるから。』

『何だす？』

『これ。』と言つて、袂の中から丁寧な、美しい花簪を出して見せた。

『綺麗だなす。』

『……………。』

『買ったのすか？』

藤野さんは頭を振る。

『買ったのすか？』

『阿母さんから。』と低く言つて、二度計り獻獻あげた。

註 (1) 臆氣—模糊不清。(2) 性質として—天性如此。

『富太郎さん（新家の長男）に苛責られたのすか？』

『二人に。』

私は何とか言つて慰めたかつたが、何とも言ひ様がなく、黙つて顔を瞞めてゐると、『これ上げようかな？』と言つて、花簪を弄つたが、『お前は男だから。』と後に隠す振をするなり、涙に濡れた顔に美しく笑つて、バタ／＼と門の中へ駈けて行つて了つた。私は稚い心で、藤野さんが二人の従兄弟に苛責られて泣いたので、阿母さんが簪を呉れて賺したのであらうと想像して、何といふ事もなく富太郎の^二ノツペリした面相が憎らしく、妙な心地で家に歸つた事があつた。

何日しか四箇月が過ぎて、七月の末は一學期末の試験。一

番は豊吉、二番は私、藤野さんが三番といふ成績を知らせられて、夏休みが来た。藤野さんは、豊吉に敗けたのが口惜いと言つて泣いたと、富太郎が言囃して歩いた事を憶えてゐる。

休暇となれば、友達は皆、本や石盤の置所も忘れて、毎日々々山蔭の用水池に水泳に行くものであつた。私も一寸々々一緒に行かぬではなかつたが、怎してか大抵一人先に歸つて来るので、父の仕事場にしてある店先の板間に、竹屑やら鮑屑の中に腹^五匍になつては、汗を流しながら讀本を復習たり、

註 (1)苛責られた―受了^四欺侮。(2)ノツペツした―區平的。(3)口惜い

―可惜；氣憤不過。(4)言囃して―宣揚。(5)腹匍―爬。

手習をしたりしたものだ。そして又、目的もなく軒下の日陰に立つて、時々藤野さんの姿の見えるのを待つてゐたものだ。
すると、大變な事が起つた。

八月一杯の休暇、其中旬頃とも下旬頃とも解らぬが、それは／＼暑い日で、空には雲一片なく、腦天を焙りつける太陽が宛然火の様で、習との風も吹かぬから、木といふ木が皆死にかかつた様に其葉を垂れてゐた。家々の前の狭い溝には、流れるでもない汚水の上に、薄曇つた泡が數限りなく腐つた泥から湧いてゐて、日に晒された幅廣い道路の礫は足を焼く程暖く、蒸された土の温氣が目も眩む許り胸を催嘔せた。

村の後ろは廣い草原になつてゐて、草原が盡きれば何十町歩の青田、それは皆近江屋の所有地であつたが、其青田に灌漑する、三間許りの野川が、草原の中を貫いて流れてゐた。野川の岸には、近江屋が年中米を搗かせてゐる水車小屋が立つてゐた。

春は壺^ウ墓に秋は桔梗女郎花、其草原は四季の花に富んでゐるので、私共はよく遊びに行つたものだが、其頃は一面に萱草の花の盛り、殊にも水車小屋の四周には澤山咲いてゐた。小屋の中には、直径二間もありさうな大きい水車が、朝から

註 (1) 手習—習字。(2) 習と—颯口。(3) 薄曇つた—徹徹罩着。(4) 壺

墓—紫花地丁。

晩までギウ／＼と鈍い音を立って廻つてゐて、十二本の大杵が斷間もなく米を搗いてゐた。

私は其日、晒布の袖無を着て帯も締めず、黒股引に草履を穿いて、額の汗を腕で拭き拭き、新家の門と筋向になつた或駄菓子屋の店先に立つてゐた。

と、一町程先の、水車小屋へ曲る路の角から、金次といふ近江屋の若者が、血相變へて甌けて來た。

『何したと？』と誰やら聲をかけると、

『藤野様ア水車の心棒に捲かれて、でに搗かれただ。』と大聲に喚いた。私は僞とも眞とも解らず、唯強い電氣にでも打たれた様に、思はず聲を立てて『やあ』と叫んだ。

と、其若者の二十間許り後から、身體中眞白に米の粉を浴びた、髭面の骨格の逞^五ましい、六尺許りの米搗男が、何やら小脇に抱へ込んで、これも疾風の如くに駈けて來た。見るとそれは藤野さんではないか！

其男が新家の門の前まで來て、中に入らうとすると、先に知らせに來た若者と、肌脱ぎした儘の新家の旦那とが飛んで出て來て、『醫者へ、醫者へ。』と叫んだ。男は些と足淀^六して、直ぐまた私の立つてゐる前を醫者の方へ駈け出した。其

註 (1) 晒布—漂白布。(2) 筋向—斜對。(3) 或駄菓子屋—某粗店心鋪子

。(4) 血相變へて—臉色慘變。(5) 逞ましい—勇壯的。(6) 足淀して—
停步。

何秒時の間に、藤野さんの變つた態が、よく私の目に映つた。男は、宛然驚が黃鳥でも攫へた様に、小さい藤野さんを小脇に抱へ込んでゐたが、美しい顔がグタリと前に垂れて、後には膝から下、雪の様に白い脚が二本、力もなくブラ／＼してゐた。其左の脚の、膝頭から斜めに踵へかけて、生々しい紅の血が、三分程の幅に唯一筋！

其直ぐ後を、以前の若者と新家の旦那が駆け出した。旦那の又直ぐ後を、白地の浴衣を着た藤野さんの阿母さん、何かしら手に持つた儘、火の様に熱した礫の道路を裸足で……

其キツと堅く結んだ口を、私は、鬼ごツこに私を追駆けた藤野さんに似たと思つた。無論それは一秒時の何百分の一の

短かい間。

これは、百度に近い炎天の、風さへ動かね眞晝時に起つた光景だ。

私は、鮮かな一筋の血を見ると、忽ち胸が嘔氣を催す様にムツとして、目が眩んだのだから、阿母さんの顔の見えたも不思議な位。無中三になつて其後から駈け出したが、醫者の門より二三軒手前の私の家へ飛び込むと、突然仕事してゐた父の膝に突伏した儘、氣を失つて了つたのださうな。



註 (1)グタリと―頽然的。(2)ムツとして―惡心。(3)無中になつて―

無中即夢中、昏昏失神之意。

藤野さんは、恚うして死んだのである。

も一つの追憶も、其頃の事、何方が先であつたか忘れたが、矢張夏の日^一の赫灼たる午後の出來事と憶えてゐる。

村から一里許りのK停車場に通ふ荷馬車^一が、日に二度も三度も、村端から眞直に北に開いた國道を塵塗れの黒馬の蹄に埃を立てて往返りしてゐた。其日私共が五六人、其空荷馬車に乗せて貰つて、村端から三四町の、水車へ行く野川の土橋まで行つた。一行は皆腕白盛りの百姓子^三、中に腦天を照りつける日を怖れて大きい路^四の葉を帽子代りに頭に載せたのもあつた。

土橋を渡ると、兩側は若松の並木、其路傍の松蔭の夏草の

中に、汚い服装をした一人の女乞食が俯臥に寝てゐて、傍には、生れて滿一年と経たぬ赤兒が、嘎れた聲を絞つて泣きながら、草の中を這廻つてゐた。

それを見ると、馬車曳の定老爺五が馬を止めて、『怎しただ？』と聲をかけた。私共は皆馬車から跳下りた。

女乞食は、大儀相六に草の中から顔を擡げたが、垢やら埃やらが流るる汗に斑ちて、鼻のひしやげた醜い面に、謂ふべからざる疲勞と苦痛の色。左の眉の上に生々しい瘡七があつて、

註 (1) 荷馬車—裝貨馬車。(2) 腕白盛り—極頑皮。(3) 百姓子—農家子

。(4) 落—款冬。(5) 老爺—老兒，老伯伯。(6) 大儀相—困憊的樣子。

(7) 瘡—創痕。

一筋の血が頬から耳の下に傳つて、胸の中へ流れてゐる。

『馬に蹴られて、歩けねえだもん。』と、絶え入りさうに言つて、又俯臥した。

定老爺は、暫く凝と此女乞食を見てゐたが、『村まで行つたら可がべえ。醫者様もあるし巡査も居るだア。』と言捨てゝ、ガタ／＼荷馬車を追つて行つて了つた。

私共は、ズラリと女の前に立披つて見てゐた。稍あつてから、豊吉が傍に立つてゐる萬太郎といふのの肩を叩いて、『汚ねえ乞食だア喃。首玉^二ア眞黒だ。』

草の中の赤兒が、怪訝相な顔をして、四^三這になつた儘私共を見た。女はビクとも動かぬ。

それを見た豊吉は、遽かに元氣の好い聲を出して、『死んだドウ、此乞食ア。』と言ひながら、一掴みの草を採つて女の上に投げた。『草かけて埋めてやるべえ。』すると、皆も口々に言罵つて、豊吉のした通りに草を投げ初めた。私は一人遠くに離れてゐる様を心地でそれを見てゐた。

と、赤兒が稍大きい聲で泣き出した。女は草の中から顔を擽げた。

『やあ、生きてく。また生きてア。』と喚めきながら

註 (1)立抜つて—整列的站着。(2)首玉—項頸。(3)四這になつた—手

足落地、爬着。

、皆は豊吉を先立て、村の方に遁げ出した。私は怎したものが足が動かなかつた。

醜い乞食の女は、流れた血を拭かうともせず、どんよりとした疲勞の眼を怨し氣に睜つて、唯一人残つた私の顔を凝と瞞めた。私も瞞めた。其、埃と汗に塗れた顔を、傾きかけた夏の日が、強烈な光を投げて憚りもなく照らした。頬に流れて頸から胸に落ちた一筋の血が、いと生々しく目を射た。

私は、目が眩いて四邊が暗くなる様な氣がすると、忽ち、いふべからざる寒さが體中を戦かせた。皆から三十間も遅れて、私も村の方に駈け出した。

然し私は、怎したものが先に駈けて行く子供等に追つかう

としなかつた。そして、二十間も駈けると、立止つて後を振り返つた。乞食の女は、二尺の夏草に隠れて見えぬ。更に豊吉等の方を見ると、もう乞食の事は忘れたのか、聽高に「吾は官軍」を歌つて駈けてゐた。

私は其時、妙な心地を抱いてトボ／＼と歩き出した。小さい胸の中では、心にちらつく血の顔の幻を追ひながら、「先生は不具者や乞食に悪口を利いては可^二ないと言つたのに、豊吉は那麽事をしたのだから、たとひ豊吉が一番で私が二番でも、私より豊吉の方が悪い人だ。」といふ様な事を考へてゐたのであつた。

註 (1) どんよりとした―渾濁的。(2) 不具者―殘疾者。

あはれ、其後の十幾年、私は村の小學校を最優等で卒へると、高島先生の厚い情によつて、盛岡の市の高等小學校に學んだ。其處も首尾よく卒業して、縣立の師範學校に入つたが、其夏父は肺を病んで死んだ。間もなく、母は隣村の實家^二に歸つた。半年許りして、或事情の下に北海道に行つたとまで知つてゐるが、生きてゐるとも死んだとも、消息を受けた人もなければ、尋^三ねる的もない。

私は二十歳の年に高等師範に進んで、六箇月前にそれも卒へた。卒業試験の少し前から出初めた悪性の咳が、日まし^四に募つて來て、此鎌倉の病院生活を初めてからも、既に四箇月餘りを過ぎた。

學宵の夕、病室の夜、言葉に文に友の情は沁み込^五と身に
覺えた。然し私は、何故か多くの友の如く戀といふものを親
しく味つた事がない。或友は、君は餘りに内氣^六で、常に警戒
をし過ぎるからだと言つた。或は然うかも知れぬ。或友は、
朝から晩まで黄卷堆裏に没頭して、全然社會に接せぬから機
會がなかつたのだと言つた。或は然うかも知れぬ。又或友は
、知識の奴隸になつて了つて、氷の如く冷酷な心になつたか
らだと冷笑した。或は實に然うなのかも知れぬ。

註 (1) あはれ—嗚呼。(2) 實家—母家。(3) 尋ぬるの—問詢之處。(4)

日ましに募つて一日増一日。(5) 沁み込くと—深深感受到。(6) 内氣—

小心謹慎。

幾人の人を癒やし、幾人の人を殺した此寢臺の上、親み慣れた薬の香を吸うて、濤音遠き枕に、夢むともなく夢むるのは十幾年の昔である。ああ、藤野さん！僅か八歳の年の半年餘の短い夢、無論戀とは言はぬ。言つたら人も笑はうし、自分でも悲しい。唯、木陰地の濕氣にも似て、日の目も知らぬ淋しき半生に、不圖天上の枝から落ちた一點の紅は其人である。紅と言へ、あゝ、かの八月の炎天の下、眞白き脛に流れた一筋の血！まさまざとそれを思出す毎に、何故といふ譯もなく私は又、かの夏草の中に倒れた女^を食を思出すのである。と、直ぐ又私は、行方^二知れぬ母の上に怖い想像を移す。咯血の後、昏睡の前、言ふべかざる^一疲勞の夜の夢を、幾度

となく繰返しては、今私の思出に上る生の母の顔が、もう眞の面影ではなくて、かの夏草の中から怨めし氣に私を見た、何處から來て何處へ行つたとも知れぬ、女乞食の顔と同じに見える様になつたのである。病める冷き胸を抱いて、人生の淋しさ、孤獨の悲しさに遺瀨三もない夕べ、切に戀しきは、文字を學ぶ悦びを知らなかつた以前である。今迄に學び得た知識それは無論、極く零碎なものではあるけれ共、私は其爲に半生の心血を注ぎ盡した。其爲に此病をも得た。而して遂に、私は果して何を教へられたであらう？何を學んだであらう

註 (1) まざまと一顯明地。(2) 行方知れぬ一行踵不明。(3) 遺瀨もな

一無聊的。

？學んだとすれば、人は何事をも眞に知り得ざるものだといふ、漠然たる恐怖唯一つ。

ああ、八歳の年の三月三十日の夕！其以後、先づ藤野さんが死んだ。路傍の草に倒れた女乞食を見た。父も死んだ。母は行方知れずになつた。高島先生も死んだ。幾人の友も死んだ。臆ては私も死ぬ。人は皆散りトである。離れトである。所詮は皆一様に死ぬけれども、死んだとて同じ墓に眠れるでもない。大地の上の處々、僅か六尺に足らぬ穴に葬られて、それで言語も通はねば、顔も見ぬ。上には青草が生える許り。

男と女が不用意の歡樂に耽つてゐる時、其不用意の間から

子が出来る。人は偶然に生れるのだと思ふと、人程痛ましいものはなく、人程悲しいものはない。其偶然が、或る永劫に亘る必然の一連鎖だと考へれば、猶痛ましく、猶悲しい。生れなければならぬものなら、生れても仕方がない。一番早く死ぬ人が、一番幸福な人ではなからうか?!

去年の夏、久し振りで故郷を省した時、栗の古樹の下の父が墓は、幾年の落葉に埋れてゐた。清光童女を記した藤野さんの小さい墓碑は、字が見えぬ程雨風に侵蝕されて、萱草の中に隠れてゐた。

立派な新築の小學校が、昔草原であつた、村の背後の野川

註 (1) 所詮—畢竟。(2) 不用意—無準備的；無思慮的。

の岸に立つてゐた。

變らぬものは水車の杵の數許り。

十七の歳お蒼前様の祭禮に馬から落ちて、右の脚を折り左の眼を潰した豊吉は、村役場の小使になしてゐて、私が訪ねて行つた時は、第一期地租附加税の未納督促状を、額の汗を拭き／＼膽寫版で刷つてゐた。

註 (1) 村役場―村自治公所。

附錄

兩條血痕

日本石川啄木著
周作人譯

兩條的血痕

日本石川啄木著
周作人譯

夢一般的幼小時候的追憶，喜悅和悲哀都只是天真純潔的事情，朦朧地連續着，現在想到，彷彿是隔了一層微微的哀感的淡霞來看那華麗的兒童演劇似的，覺得很可懷戀，其中有兩件事，就是在十五六年後的今日，還是鮮明的留在我的眼前。

那一件在前，那一件在後，有難於明瞭的記出來了。我在六歲時進了本村的小學校，在從二年級升到三年級去的大考裏，我遇着了這半生裏只有這一回的落第。在那落第時候藤野姑娘正還存在，因此其中的一件記得確鑿是第二次做二年生的八歲的那一年，暑假中的事情。還有一件因為是盛暑中的事，大約也是那時候的事情罷。

現在是教育部令很嚴禁，叫學齡前的兒童入學的事，全然沒有了，在我幼小的時候，又因為是偏僻的鄉間，却似乎也不要費怎樣麻煩的周折。但是只有六歲，又很虛弱像我這樣的人，去入學的却很少。當時實在因為我的游嬉的同伴，比我年長一兩歲的小孩，都是五個一回七個一回的進了學校，寂

寞的了不得，天天去逼迫和善的父親「要上學去」，當初只是說你還太小，不准我去，但原來不是什麼壞事，父親也似乎心裏很歡喜，所以末了有一天他終於去和高島先生說妥，從第二天起我也請父親給我買兩枚對折的紙石板，以及石筆硯台等，同大家一起的上學校去了。因為這緣故，我的入學比同級的學生要遲一個月了。我的父親是少有的喜歡學問的人，在沒有工作的冬天的晚上，時常拏了熏黑的幾乎連字也看不出來，書面也粉碎了的孝經或十八史略的殘本，到高島先生那裏去喝茶談天，順便請他指教。

那時父親大約是三十五六歲，在鄉間是稀有的晚婚，或者因為這緣故，我沒有兄弟和姊妹，只是一個獨子，連一句硬話都沒有被說過，這樣的養育下來的，所以身長雖然同平常一樣，却是瘦削細長，和近地的小孩們也常常赤着腳作戶外的遊戲，但不知怎的臉色總是蒼白的。無論競走或是角力，為我所敗的人一個都沒有。因此即使這樣的游嬉着，偷偷的溜走，回到家裏去的事也常有的。上了學校去以後，這個癖氣終於不會改，雖然因為牆上寫字，或者從柵欄裏鑽出，被先生訶斥，也如別個學生一般，但總是怯弱，不大說話，倘若被命令去讀寫在黑板上的字，便漲紅了臉，低着頭，也不回答，變成石頭一般的堅硬了。雖然是自己願意進學校去的，對於學校却終於沒有興味，而且有時還乘中午放學回

家，不給別人知道，躲在後面堆積什物的屋裏，不再去做午後的功課了。病身的母親有一天曾經摩着我的頭頂說道，這個孩子只要肯略略和人家的小孩們去打架，那就好了。我聽了也不說什麼，但是心裏想道，倘若打起架來，我是一定要輸的哩。

我家是村裏只此一家的箍桶舖。單靠箍桶的生意不能夠維持生活，所以又從近村的號稱近江屋的一家大地主那裏賃了幾畝田來耕種。因此整年喫的是雜着許多稗子的飯，一點都沒有黏氣。偶然晚上有人來談天，母親便拏一握的米放在火鏊裏炒焦了，「泡上開水」拏出來代茶。家裏是這樣的境況，我也就終年穿着滿是補釘的洋布袴，只到腰間爲止的洗舊了的小袖衣服，跟了穿着同樣服裝的小孩們赤着脚走路，這些事也都已習慣了；頭髮長了的時候，父親便親自給我剃。名字叫作檜澤新太郎，但是村裏的人，大家只叫我作『箍桶舖的新太』。

我在學校裏既然如上文所說，對於各種學科一點都不用功，當從第一年級升到第二年級去的時候，在三十多人的一班裏，考在倒數第二名總算勉強及格了。但是不幸我家兩邊鄰舍的小孩，一個是上級的男生，一個是同級的女生，在那時都領到用『水引』（註一）束着的幾帖白紙當作獎品，我雖

（註一）水引是半紅半白的紙捻，有贈與時，以此橫縛物品上。

然幼小，但心裏也覺得不很舒服，這一天從學校回來，並不同平常一樣的到門外去，直到天黑只是蹲在很大的地爐的角上，茫然的弄着火篋。父親喫過晚飯，買了兩條黑羊羹（註二）來，說因為你是最小，安慰了一番。

這件事到了第二天也完全忘記，還同以前一樣的時常不做下午的功課；這樣過去，七歲這一年完了，就是正月，第三學期正開始的時候，學校裏發生了一件頗為稀有的事情，這就是名叫佐藤藤野的庄村裏是無比的美麗的一個女孩子，突然編進一年級裏來了。

百餘的生徒都撐起眼睛來了。實在這藤野姑娘，即使現在想起來，也是不大常見的美麗的女兒，前髮垂到眉邊，圓的臉龐，大而且黑的眼睛很是明澈，顏色極白，笑起來的時候頰上現出笑窩。男生不必說了，便是女生也都只用什麼紅布片之類束髮，頭上包着齷齪的月白手巾，或者在下雪的日子，穿了笨粗的雪屐，從頭上披着半截的紅毛毯上學校來。在這樣一羣人的中間，夾着身穿染出大朵菊花，的華麗的縐綉衣服的藤野姑娘，正是比在村端泥田裏開着的荷花還要鮮明的映在我們的眼裏了。

藤野姑娘據說以前曾在離村不過十里的盛岡市的學校裏學過，現在同母親寄住在近江屋的

（註二）羊羹是一種點心，以豆沙和糖及石化汁煮後凝結而成的。

支派，開着綉緞舖的稱作新家的家裏。

據村裏的傳聞，藤野姑娘的母親便是從二三年前患着眼病的新家的主母的妹子，本來在盛岡也開着頗大的銅鏡店，不知怎樣的破了產，丈夫上吊死了，伊便帶了遺腹子藤野姑娘，到新家來寄住，一面給他們助理家務。這個傳說就是我們小孩也都知道的。藤野姑娘的母親是一個身材瘦小，顏色很白而且美麗的人，又和伊的姊姊那新家的主母不同，很是快活而且待人非常之和善。

村裏的學校在那時不過是很簡陋的國民科的單級，此外補習科學生六、七人，教師只是高島先生一個人，教室也只一間。學級雖然不同，每當藤野姑娘用了鈴一般的好聲音朗誦讀本的時候，一百多人便都停住了石筆和毛筆，向着那邊看。我因為最不喜歡習字與算術，常常茫然的望着藤野姑娘的那邊，這其間先生使用竹鞭輕輕的敲我的頭頂。

藤野姑娘無論什麼學科，成績都很好。有一天，二年級的女生們在上課的時候做頑皮的遊戲，先生引了藤野姑娘的例，曾加以訓戒。上級的學生略有點不服，但是我却毫不覺得詫異，因為藤野姑娘在那時候是全校裏的，全村裏的，——不，在當時的我的全世界裏的，第一個美而且好的人。

這年的三月三十日，照例的舉行給發文憑的儀式，從近江屋的主人起，村長，醫生，以及別的村民

共有五六人，都到學校裏來。我也穿了珍藏的長袖衣服，用半幅的白棉布當作『兵兒帶』和大家一同去。穿着黑色洋服的高島先生，覺得比平日更爲像樣了；教室也裝飾得很像樣，正面交叉着日章旗，前面是蓋着白布的桌子，彷彿記得上面擺着大花瓶，插些松枝和竹。教育勅語的捧讀，「君之代」的合唱都已完了，十幾個畢業生輪流的被叫上前去，都高高興興的擎下畢業文憑來。其中的優等生又被叫到村長的面前，去領獎品。其次案着三年二年一年的順序，宣讀新升級的姓名，但不知怎的裏邊却沒有我的名字。旁邊的小孩都說道，『新太落第了，落第了！』看着我的臉。我在那時候是怎樣的心情，現在記不起來了。

儀式完了之後，只有說是近江屋所賞的紅白年糕，我也分得一份。大家聚在一起很快活的歸家去了，我們落第的六七個人，因爲先生說是另有事情，被留下在後面。住在村端的灰棚裏的小姑娘也在其內，已經哭出來了，我却想道，或者先生隨後給我文憑也說不定，想着這種沒有理由的事，專心等候着。

過了一刻，大家輪番的被叫到教員室裏去，或受訓戒，或受勉勵，我却正是末後的一個了。先生對我說道，『你年紀還小，身體又弱，且在二年級裏再讀一年罷。』我幾乎聽不見的答了一聲『是』。行

一個禮，先生摩着我的頭頂道：『你太柔順一點。』於是從桌上的盤裏取了三片麥粉的煎餅給我。在那時候深深的感謝先生的慈惠，再也沒有了。在這屋裏，村長以下還有兩三個老人們留在那里。

我將包在紙裏的紅白的年糕和麥粉煎餅用兩手抱在胸前，悄悄的出來，剛走到塔口，無端的覺得悲哀，將要哭出來了。好不容易纔將來到喉間的哭聲竭力鎮壓住，但是想到先生的慈惠，被朋友們所冷笑的羞恥，回到家裏將說些什麼，小小的胸脯裏完全塞住，眼淚便簌簌的落下來了。這時候忽然覺得有兩三個女生，不知怎的還留在校裏，正從校役室那邊出來，我感着說不出的羞恥，心裏猛跳起來，便緊貼的靠了柱子站立着，垂着頭，使他們看不見我的面貌。

覺得輕泛的草履的聲音，急速的從後面走近前來，又聽得人聲道：『怎麼了，新太郎？』這原來是藤野姑娘。向來還不曾交談過一句話的人，現在這樣的見問，我不禁抬起頭來，藤野姑娘在伊的清明的眼裏充滿着柔和的光，正注視着我。我又即俯首，緊咬着下唇，但是啜泣的聲音終於洩露出來了。

藤野姑娘暫時沉默着，隨說道：『不要哭了，新太郎，我這回也是第末名勉強及格的呢。』彷彿對着自己的兄弟似的這樣說了，又接着說道：『明天給你拏好的東西來，不要哭了；大家怕要笑話哩。』伊說着想來窺探我的面貌，但是我將面龐貼着柱子，竭力的隱藏，伊便又急急的走去了。藤野姑娘雖

然無論什麼學科成績都很好，因為在第三學期纔進去的，所以列在末，升到第二年級去的。

這一天的傍晚，父親正在店堂裏冬冬的嵌桶箍，母親出外汲水去了，我悄悄的蹲在地爐邊，在幾乎不能辨別人的面目的薄暗中，將竹屑拋進火裏去，一心看着他彷彿吐舌一般的燃燒下去，忽聽得有人在後門口小聲喊道，『新太郎，新太郎，』我出了一驚，突然的跳下泥地，也不穿草履，便奔向後門去。

藤野姑娘獨自一個人靠了門立着，見了我便莞爾一笑，說道，『啊呀，赤着脚！』似乎略略皺一皺眉，於是急忙從袖底裏取出一件用紙包着的東西來，遞在我的手裏。

『這個送給你。你要竭力的用功；我也去用功……』這樣說了，我只是茫然的立着，一句話都不說，伊已經在昏黃中走去了；走了三四丈遠，又回過身來，用手在面前左右搖動；我省悟這是教我不要對別人去說，便點頭示意，伊就跑進梨樹下去不見了。

紙包裹是一冊洋紙的筆記簿，一枝用去了一半了的舊鉛筆，此外裹在桃紅的羽紗小片裏的是一個鉛製的玩具手表。

夜裏，我在薄暗的洋燈的影下，舔着鉛筆，在給我的筆記簿上，從讀本的第一課起，很端正的抄寫

了四五葉。我感到學習文字的喜悅，實在是這時候爲最初了。

人的心是很奇妙的東西。第二次的二年級的功課又開始了，我不知怎的覺得上學校去很愉快，向來厭倦的無法可想的五十分鐘的授業，現在却不知不覺的就過去，被竹鞭敲頭的事也沒有了。

在廣大的教室裏，南北兩面的牆壁上各挂着兩塊黑板，高島先生急急忙忙的在這四塊黑板前面走來走去；二年級生向着西北角的黑板，兩行粗糙的桌椅並排的放着；聚集在前面的桌子旁邊的是女生，藤野姑娘自然也就在這中間了。

新學年開始後的第三天，我第一次被先生所稱贊了。只要沉靜的聽着，先生所教的事情必定懂得；在兒童的記憶力強盛的頭腦裏，會理解的事情很不容易忘記。以後每逢先生說『知道的人舉手』的時候，我幾乎沒有一次不舉手的。

我對於各項學科並沒有嫌憎的東西，但是其中習字的時間尤爲我所喜歡。先生大抵命令我去辦注水的差使。我擎着洋鐵的水壺，在各桌子前面走來走去注水。桌子的兩頭各放着一個硯台，大都是虎斑石或是黑石所做；只有藤野姑娘的不知道是什麼石頭，却是紫色的。我給他們注水的時候，略俯首行禮的也只有藤野姑娘一個人。

最是擔心的是算術的時間。我同藤野姑娘都是八歲；同級裏還有一個叫豐吉的小孩，却比我們要大兩歲，身體也大，頭腦也發達了；我所知道的事情，藤野姑娘大抵也都知道，但是我們兩人舉手的時候，大抵豐吉也舉起手來。兒童時代的兩歲之差，在頭腦活動的優劣上大有懸隔，最顯著的便是算術。豐吉的算術，是他最得意的課目。

先生出題後，又轉到別的黑板前面去，隨後回來，高舉着竹鞭說道：『做好了的人舉手。』倘若這是不大容易的算題，藤野姑娘舉着手，或是並不舉手，必定回過頭來望着我這邊。我在伊的眼裏能夠明顯的看出那滿干的微波；兩人都舉起手而豐吉不會的時候，伊的眼裏閃着喜悅的光；伊與豐吉都不會做，只有我舉手的時候，便泛着天真羨望的波；伊與豐吉都舉起手，只有我不會的時候，便流露出惋惜的眼光；或者兩人都不會做，豐吉獨自傲然的舉着手的時候，美麗的藤野姑娘的面上霎時間便爲暗影所遮掩了。

藤野姑娘讀書的聲音，和別的女生低聲誦讀連鄰席的人都聽不清的相反。極其清楚而且嚮朗；伊的讀法裏，又有一種爲村中兒童所沒有的聲調。過了一兩個月之後，我不覺無意中也用這樣的聲調讀書了。朋友們覺得了，便都笑我；我被笑了心裏想改過，但臨時高聲讀起來，這聲調一定出來了。有

一天，六七個人聚集在校役室外的井邊，談着種種事，豐吉忽然說到這事情，大加嘲笑之後，說道：

『新太和藤野姑娘配做夫妻，倒很好哩。』

藤野姑娘正站在相距五六步的地方，這時候突然回答道，『自然會配的，自然會配的，』把大家都驚倒了。我漲紅了臉，急忙的跑了出去。

大家雖然都是兒童，但男子與女子到底還有界限，在學校裏幾乎沒有一同遊嬉的時候；到了傍晚，人家的屋簷與破風都繞着晚飯的炊煙，我們常常走到街道上，玩那些『奪寶』或『捉迷藏』之類的遊戲，有時男組與女組合在一起，大家熱心的玩耍，直到天色全黑纔止。藤野姑娘輪到做『鬼』的時候，一定向着我追過來。我覺得非常歡喜。雖然我體質很弱，到底是男孩子，所以即使藤野姑娘緊閉着嘴，極敏捷的追來，也很不容易將我捉住。後來伊跑得氣喘了，本來便是故意的給伊抓住了也未始不可，但是這些地方終是孩子氣，偏是竭力的逃避。雖然如此，每回捉迷藏的時候，藤野姑娘却仍是只向着我追來。

在新家裏有藤野姑娘的三個中表兄弟：大的兩個是學校的四年和三年生，最小的還沒有入學；那兩個人成績都不很好，和同年紀的近江屋的孩子們感情極壞。據我朦朧的記憶，彷彿藤野姑娘也

常被他們所虐待。有一天曾看見伊在什麼地方被他們所打，但是記不清楚了。只有一次，我挑着一副小水桶，往新家後門口的井裏去汲水，藤野姑娘正在那里靠了門枋立着，獨自哭泣。我便問『怎麼了？』伊並不回答，只用前齒咬着長袖的下端。我見了便不能再說什麼，只覺得連自己已也彷彿含淚了，沈默着拏了大杓舀水，挑起擔來剛要走，却被叫住道：

『新太郎。』

『什麼？』

『給你看好的東西。』

『什麼東西？』

『這個，』說着從袖子裏用心的拏出一枝美麗的花簪來給我看。

『好齊整！』

『……』

『買的麼？』

藤野姑娘搖伊的頭。

『要來的麼？』

『母親給的，』低聲的說，又抽咽了兩次。

『給富太郎（新家的長男）欺侮了麼？』

『他們兩人。』

我想說些什麼去安慰伊，但是沒有話可說，只是沈默着望着伊的臉，藤野姑娘忽然說道，『給你罷？』一手弄着花簪，却又說道，『因為你是個男人……』便裝作將花簪隱藏背後的模樣，在爲眼淚所濕的臉上現出美麗的笑容，隨即帖達帖達的跑進門裏去了。我在幼小的心理想像藤野姑娘被兩個表兄弟所欺侮，所以哭了，大約母親給伊花簪去寬慰伊的，不知怎的覺得那富太郎的匾平的長臉很可惡，壞着一種奇妙的心情回到家裏了。

不知不覺的四個月已經過去，七月底便是第一學期的考試，成績發表出來是豐吉第一，我第二，藤野姑娘第三，以後就是暑假了。我還記得富太郎到各處宣揚，說藤野姑娘因爲輸給豐吉了，說是氣憤不過，終於哭了。

到了暑假，大家連安放書和石板的地方都忘記了，每天都往山陰的水塘裏去游泳。我也時常同

去，但大抵獨自先回家，在父親的作場，店堂的板台上，爬在竹屑和匏花的中間，流着汗溫讀本，或是習字，或者毫無目的的站在簷下的陰影裏，等候藤野姑娘的影子的出現。

這其間，重大的事件發生了。

八月整月的暑假裏，這是在中甸，還是下甸呢，都記不得了，只是一個非常炎熱的日子，空中並無一片雲，烤在頂上的太陽正如烈火一般，也沒有一點微風，一切樹木都彷彿垂死的挂着葉子。在人家前面的狹隘的溝裏，從臭泥裏湧出無數渾濁的水泡，浮在並不流動的汗水上面；太陽曬着大路上的石子都熱得爛腳，蒸發出來的泥土的熱氣使人惡心而且幾乎昏眩。

村的後面是廣闊的草原，草原盡處是幾十畝的青田，這都是近江屋的產業。灌溉這田的約二丈寬的一條小河，貫通草原中間奔流過去，河岸邊有近江屋的一所水碓小屋，終年在那里搗米。

在草原上春天長着紫花地丁，秋天有桔梗和女郎花。四時都有各樣的花草，我們平日常去游玩，但在那時原上一面盛開着茅草花，在水碓小屋的周圍開得尤為繁茂。小屋裏邊有直徑丈餘的一個水車。終日迴轉着，發出澀滯的聲音，十二個大木杵毫不間斷的搗着米。

這一天，我穿着漂白布的無袖的短衣，也不繫腰帶，黑袴底下躡着一雙草履，用臂膊拭着額上的

汗，站在新家斜對門的一家粗點心店的前面。

忽然在前面一町遠近的地方，往水碓小屋去的拐角上，近江屋裏一個名叫金次的少年工人，變了顏色向着這邊跑來。

『什麼事？有人攔着問，』

『藤野姑娘被水車的軸子捲住，給木杵搗壞了。』他大聲嚷着回答。我也不知道是真是假，只覺得彷彿是被強烈的電氣所擊似的，不禁發了大聲叫道『呀！』

在少年的後面，大約相距六丈，那個全身雪白的沾着米糠，滿面胡鬚，骨格雄偉，六尺許高的搗米的男人，脇間挾着什麼東西，也是疾風似的向這邊跑來。仔細看時，這「所挾的」不是藤野姑娘却是什麼！

他走到新家的門前，正要進去的時候，先來通報的那個少年同着正赤着膊還不及穿衣的新家的主人飛奔出來，嚷道：

『醫生家去，醫生家去！』那男子略略停步，隨即跑過我的面前，向醫生家去了。這幾秒鐘時，藤野姑娘的異樣的姿態很明瞭的映進了我的眼裏。那個男子宛如大鷲抓住黃雀一般的將伊挾在脇下，

藤野姑娘的美麗的臉頰然的垂在前面，後邊是從膝踝以下雪一般白的兩隻腳，柔軟的挂着。左邊的腳上從膝頭斜到後跟，是一條約有三分寬的新鮮的血痕！

後面便是以前的少年和新家的主人快步跟着。主人的後面是穿着白地浴衣的藤野姑娘的母親，手裏還擎着什麼東西，在火一般熱的石子路上赤着兩腳……

那緊閉着的嘴，我暗想這與捉迷藏時候向我追來的藤野姑娘很像，——這當然只是在一秒鐘的幾百分之一的短的時間裏罷了。

這是在將近百度的熱天，連微風都沒有的正午所發生的情狀。

我見了那一條的新鮮的血痕忽然覺得惡心像要嘔吐的樣子，眼睛也昏眩了，在那時候還能看見藤野姑娘的母親的面貌，幾乎不可思議了。我昏昏的跟在後邊快跑。我家正在醫生住宅的這邊，相隔兩三家，我便奔入，突然的伏在正在工作的父親的膝上，就此人事不省了。

藤野姑娘便是這樣的死了。

還有一件回憶，同是那時候的事情，雖然已經忘記是那一件在先，但還記得也是夏天太陽赫灼的午後的事。

往離村一里（註三）許的K車站的馬車，每日兩三回在村端一直往北延長過去的國道上，駕着滿被塵土的黑馬，踢起灰塵，來回的走着。那一天，我們五六個人趁着這空馬車，到村外三四町水車左近的土橋那裏去游玩。同去的都是頑皮的鄉下孩子，其中也有人怕那直曬頭頂的太陽，拏了大的款冬葉戴在頭上，當作涼帽的。

過了土橋，兩傍都是小松樹的平林；在路旁松樹陰下夏草的中間，俯伏的躺着一個身穿汗穢的衣服的丐婦，傍邊是一個不滿一歲的嬰兒，沙聲叫喊，一面在草裏亂爬。

拉馬車的定老兒看見了，便止住馬車，高聲問道：『怎麼了？』我們也都從馬車上跳了下來。

丐婦很困頓似的從草裏抬起頭來，滿面垢泥塵土，被汗流成斑駁的條紋，揪着鼻子，一個很醜的面貌，現在說不出的疲勞和苦痛的顏色。左邊眉毛上有一個新鮮的傷痕，一條鮮血沿着面頰轉到耳下，又流到胸前去。

『給馬踢了，走不動。』伊將要氣絕似的說，隨又俯伏下去了。

定老兒暫時注視着這丐婦，說道：

（註三）日本一里約當中國六里，三十六町爲一里。

『不如往村裏去；那裏有醫生，警察也在那里。』說了隨即趕着馬車一直去了。

我們整列的站在女人面前，看着過了一刻，豐吉拍着立在旁邊的萬太郎的肩頭說道：

『好髒的化子呀，頸子漆黑的。』

草裏的嬰兒現出怪訝的神情，爬在地上看着我們。女人一動都不動。

豐吉看了這情形，忽然發出元氣很好的聲音道：

『死了，這個化子！』說着拔了一把野草，撒在女人身上道：

『給伊蓋上草，埋葬了罷。』

太家見了也都嘴裏罵着，同豐吉一樣的動手撒草。我「不去加入」，覺得彷彿獨自遠隔似的，看着他們的動作。

嬰兒忽然提高了聲音叫喊起來了。女人從草裏抬起頭來。

『呀，活了，活了！還活着哩。』大家嚷着，由豐吉領路，往村的那邊跑去了。我不知怎的却沒有走。

醜陋的丐婦也並不擦去流下的血，怨恨似的睜着渾濁的疲勞的眼，注視着獨自留下的我的臉。我也注視着。傾斜的夏日放出強烈的光線，毫無顧忌的曬着伊那爲塵土和汗所汗的面龐。沿着面頰，

從頸間流到胸裏的一條血痕，非常新鮮的刺人眼目。

我目眩了，覺得四周變成黑暗，忽然感到不可言狀的寒冷，使我全身顫抖了。我便也向村裏跑去，已經比別人落後了三十間了。（註四）

但是我不知怎的並不想去追上那先走的小孩們；跑了二十間的路，隨即停住了，回過頭去看。那個丐婦隱在二尺長的夏草裏，看不見了。再看豐吉那邊，他們似乎已經忘記了化子的事，都高聲唱着『我的官軍』的歌跑着去了。

我那時候懷着一種奇妙的心情，彳亍走上前去。在幼小的胸中，勉力想驅去映在心裏的那個血臉的幻影，一面這樣的想着：

『先生說過不可嘲罵殘疾的人和化子，豐吉却幹了那樣的事，那麼即使豐吉考在第一，我是第二，豐吉的人却比我更是不好了。』

這以後的十幾年中，我在本村小學校裏最優等畢業，因了高島先生的厚情，在盛岡市高等小學校肄業。那邊也好好的畢了業，進了縣立的師範學校。在這年的夏天，父親生肺病死了。不久母親回到

（註四）六尺爲一間，六十間爲一町。

鄰村的母家去，過了半年，因為某種事情，聽說往北海道去了，現在是生存着呢，還是死了呢，沒有人得到伊的消息，也沒有尋訪的線索。

我在二十歲的時候進了高等師範學校，在六個月前也已畢業了。從畢業考試的前幾時發作的惡性的咳嗽逐日厲害起來，在這鎌倉過病院生活也已經有四個多月了。

學窗的傍晚，病院的長夜中，我從言語和書簡裏感到朋友的交情，深深的沁到身裏去了。但是不知怎的我不會能夠像許多朋友一樣，親密的嘗過戀愛的滋味。有一個朋友批評我說，這是因為你太謹慎，常常過於警戒着的緣故。或者如此，也說不定。別一個朋友說，因為從早到晚沒頭於書卷堆裏，全然不和社會接觸，所以沒有這樣的機會。或者如此，也說不定。又有一個朋友說，因為全然成爲知識的奴隸，養成冰一般的冷酷的心的緣故。或者實在如此，也說不定。

在這活了幾多人，死了幾多人的病牀上，吸着聞慣了的藥香，靠在遠聞濤聲的枕上，似夢非夢的夢見的，正是十幾年前的舊事了。唉，藤野姑娘！僅僅八歲時候的半年短夢，自然不能說是戀愛。這樣說了，人家會要見笑，自己也覺得可哀。但是，這樹陰下的濕氣似的，不見陽光的寂寞的半生裏，不意的從天上的花枝上落下了一點的紅來，那便是伊這個人了。說起紅來，——唉，那個八月的夏天之下，在雪

白的脚上流着的一條的鮮血！明明白白的想起這個情景來，我不知爲什麼緣故，又想到倒臥在夏草裏的那個丐婦，而且我又即將可怕的想像移到行蹤不明的母親的身上去。咯血之後，昏睡之前，不能言狀的疲勞之夜的夢，屢次反復，現今我所想起的母親的面貌，已經不是那真的面影，却似乎與那從夏草裏怨恨似的看着我，不知從何處來也不知向何處去的丐婦是同一的面貌了。抱着病而且冷的心胸，感到人生的寂寞，孤獨的悲哀，百無聊賴的晚間，非常可以懷戀者，只是不會知道學習文字的喜悅以前的往昔罷了。至今我所學得的知識，當然只是些極零碎的東西，但是我却爲此注盡了半生的心血了，又爲此得了這個病了。然而我究竟受到什麼教益，學得什麼東西了呢？倘說是學得了，那便是說人到底不能真實知道一切的事物這一個漠然的恐怖而已。

唉，八歲那年的三月三十日傍晚呵！自此以後，藤野姑娘最先死去了。見了倒臥在路旁草裏的丐婦了。父親也死了，母親行蹤不明了。高島先生也死了。幾個朋友也都死了。不久我也就將死去罷。人都零零落落的，各自分散的。人們雖然都是一樣的死，但是也不能說是死了便可睡在同一的墳墓裏。葬在大地之上到處散着的不足六尺的土穴裏，言語也不相通，面貌也不相見，上面只有青草生長罷了。

男女貪着不用意的歡樂的時候，便從這不用意之間生出小孩來。想到人是偶然的生來的，那麼世間更沒有比人更爲可痛，也沒有比人更爲可哀的東西了。這個偶然或者正是遠及永劫的必然之一連鎖也未可定。這樣想來，人就愈覺可痛，愈覺可哀了。倘若是非生不可的東西，那麼生了也是無聊。最早死了的人豈不便是最幸福的人麼？

去年夏天，久別之後，回到故鄉的時候，老栗樹下的父親的墳墓埋在積年的落葉之下了。記着『清光童女』的法號的藤野姑娘的小小的墓碑，被風侵蝕到文字都已漫漶，隱在茅屋草叢中幾乎不見了。

壯麗的新築的小學校，聳立在先前的草原，村後的小河的岸邊。

不會改變的只是水車的木杵的數目。

豐吉在十七歲時參與倉前神社的祭禮，跌下馬來，折了右腳，瞎了左眼，現在充當村中自治公所的聽差，當我去訪問的時候，正在揩着額上的汗，用臆寫板印刷上忙地丁附加稅未納的催票。

中華民國廿二年二月付印
中華民國廿二年三月出版

漢文
譯註

兩條血痕

每冊實價三角

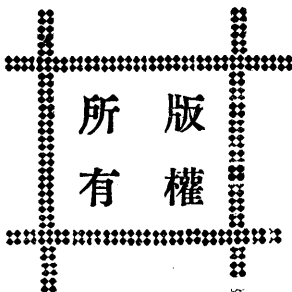
註釋者 日語研究社

發行人 高 堦 書
上海四馬路五五二號

印刷者 協新印刷公司
上海麥根路又袋角
七三五弄第三十號

發行所 開華書局
上海四馬路中市

總經理者 中學書局
上海四馬路中市



版權所有

全國經售處

- | | | |
|----------|---------|--------|
| 北平佩文齋書莊 | 天津佩文齋書莊 | 重慶平民書店 |
| 開封豫文齋書莊 | 濟南東方書社 | 杭州開明書店 |
| 西安西派報社 | 青島中華書局 | 南昌文明書局 |
| 太原晉新書社 | 南京花牌樓書局 | 南甯強華書局 |
| 廣州共和書局 | 武昌太平洋書局 | 雲南世界書局 |
| 汕頭文明商務書局 | 長沙民智書局 | 上海開明書店 |
| 廈門新民書社 | 成都北新書局 | 全國各大書局 |

上海中學生書局

地址——上海四馬路五五二號（中華書局西首）

中學生叢書

中學生叢書指導(上)	.50
中學生叢書指導(下)	.50
中學生作文指導	.50
中學生反日指導	.40
中學生婚姻指導	.40
中學生問題	.50
中學生文學	.40
中學生日記	.40
中學生遊記	.40
中學生生活	.40
中學生書信	.50
中學生創作(上集)	.60
中學生創作(中集)	.60
中學生創作(下集)	.60
中學生翻譯	.60
中學生小說作法	.40
中學生小說(長篇)	.60
中學生小說(短篇)	.60
中學生戲劇	.40
中學生童話	.40
中學生音樂	.40
中學生詩歌	.40
中學生演說	.40
中學生談話	.40
中學生小品	.40
中學生隨筆	.40
中學生中國史	.50
中學生世界史	.50
中學生文學家	.50
中學生思想家	.50

中學生辭典

中學生百科辭典	1.20
中學生文學辭典	1.40
中學生人名辭典	1.40

中學生文學讀本

一、散文集	1.00
二、應用文集	1.00
三、小品文集	1.00
四、創作小說集	1.00
五、翻譯小說集	1.00
六、詩歌戲曲集	1.00

中學生文學叢書

她的肖像	1.40
中國民歌千首	1.20
女兒	.60
矛盾(徐茂本)	.40
中學生生活素描	.30

中學生學術叢書

社會科學概論	.20
倫理學綱要	.50
社會學綱要	.50
中國社會思想史	.30
中國資本主義史	.30
資本主義批判	.30
社會思想概論	.30
新哲學概論	.30
新的作文法	.50
讀書法入門	.15

中學生創作叢書

共出廿冊 每冊三頁

一、雲倩	十一、燈光
二、追求	十二、塞外
三、微笑	十三、月夜
四、湖邊	十四、故鄉
五、弱者	十五、林中
六、心痕	十六、榮歸
七、失蹤	十七、母親
八、回家	十八、野宴
九、往事	十九、密約
十、雨天	二十、血跡

日文新書

標準日華辭典	2.00
日語漢譯辭典	2.00
速成日語讀本	.70
速成日語文法	.70
速成日語會話	.70
速成日語用例	.70

其他新書

文藝園地	1.00
愛的文庫	1.20
初夜的知識	.60
戀歌與情詩	.60
夫婦愛的創造	.40
女學生結婚指導	.40
女學生戀愛故事	.70
女學生小說	.40

(本書局詳細書目，函索即寄)

上海图书馆藏书



A541 212 0006 8628B

~~D. 1019~~